

# たがや 耕す

命を育む農業。生きていくうえで必要な食料を生産する人間の根幹となる産業です。しかし、農業者の高齢化や担い手不足などにより農業離れが進み、遊休農地も増えてきています。そのような中で、町の基幹となる酪農分野だけでなく、畑作農業に魅力を感じ、意欲をもって挑戦している人たちがいます。その取り組みを紹介しながら、町の農業の現状と新たな農業のカタチを探ります。

## 野菜・花き販売の実績

冬場の長い本町では、四季を通じて仕事ができる畜産に比べ、耕種農家は限られた一定の期間で作物を育て収穫し、収益を上げなければなりません。

天候が作物の生育状況を左右することが多く、市場の販売価格も絶えず変動し、産地間の競争も激化しています。平成十七年度の野菜販売農家は、百四十八戸。販売額別で見ると、五十万円以下が九十五戸と最も多く、三百万円以上は十戸となっています。花き農家販売戸数は、三十六戸で、五十一万円から百万円以下が十二戸と最も多くなっています。

野菜の精算実績（JA新岩手葛巻中央支所、平成十七年十一月末現在実績）では、ホウレンソウが一番多く、約九千万円。次いでダイコンが約六千七百万円、小菊が約一千六百六十万円、キャベツ約一千五百五十万円となっています。前年度と比較し、伸びてい

## 減少する農家と耕地

本町の農家数は、年々減少し、平成十七年農林業センサスによると、九百四十戸。そのうち、専業農家は百九十六戸で、兼業農家は四百七十四戸、自給的農家は二百七十戸となっています。

前回の平成十二年調査と比べると、農家数は四十七戸減少しています。農家の形態では、兼業農家が百七十七戸減少し、逆に専業農家は三十四戸、自給的農家も三十六戸増えています。これは、兼業農家の専業農家への転換や農業に従事している人たちの高齢化や担い手不足などの理由から自給的な農家へ移行したことによるものと考えられます。

平成十七年の農作物統計によると、町の耕地面積は三、八五〇畝。前年数値からすでに三十畝減少し、遊休農地化が進んでいます。

## 農業所得も減少傾向

平成十六年の農業産出額（粗生産額）は五十二億円。

そのうち、乳用牛や肉用牛などの畜産物は、四十五億三千万円で全体の八七％を占めています。

一方、米や野菜、花き、干芸農作物（たばこ）など耕種部門は、六億六千万円となっています。

農業産出額では、前年の五十億六千万円より二億円増えています。農家一戸当たりの生産農業所得で見ると、百五十二万二千元で、前年より六十三万八千元減っています。

\*自給的農家：経営耕地面積三十畝未満、かつ農産物販売金額五十万円未満の農家のこと

## 平成16年葛巻町農業産出額

部門	農業産出額
野菜	3億4,000万円
米	1億2,000万円
工芸農作物	1億0,000万円
花き	5,000万円
果実	2,000万円
雑穀・豆類	2,000万円
いも類	1,000万円
種苗、苗木類、その他	1,000万円

## ●畜産（45億3,000万円）

部門	農業産出額
乳用牛(生乳含む)	40億9,000万円
肉用牛	2億1,000万円
豚	1億4,000万円
鶏	1億0,000万円

資料：平成16年生産農業所得統計（端数処理をしているため内訳は合計と一致しません）

# 時代に合った農業を

星野 亀山秀長さん（61歳）・勇子さん（50歳）

生まれも育ちも東京という秀長さんが都内の銀行を辞めて、農家に転身したのは今から九年前のこと。もともと自宅の屋上で家庭菜園をやっていたほどの園芸好き。二女の就職を機に、妻勇子さんの実家で農業に取り組み始めました。最初は、試行錯誤の連続で、花のことはまったく分からず、橋場の波紫福子さん（69歳）にはよく教えてもらったと振り返ります。

「農業の良さは、自分の気持ち次第で予定が立てられること。やればやっただけのものができ、うまく出来たときの喜びは何とも言えません。途中で苦しいことがあっても最後の楽しみがあるから」と農業の魅力を語ります。

「直販の良さは、消費者の生の声が届けること。生産者の顔が見える農業で、人と人とのつながりを広げていきたい。これからは、時代に合わせたものづくりをする必要があり、天候とうまく付き合えば人と違うことができます」と農業への興味は限りなく続きそうです。



イチゴの苗を定植する亀山さん夫妻

## 経営面積

イチゴハウス3棟（400平方メートル）、トルコギキョウ2棟（260平方メートル）、リンドウ15％、トウモロコシ25％、ヤマブドウ15％、果樹（サクランボ・桃・洋梨など）ほか